

# 14 自分タイム

## 総合的な学習「自分タイム」領域

### 自分タイムプロジェクト

#### 1 「自分タイム」でねらうもの

「自分タイム」とは、子ども一人ひとりの興味・関心から出発し、学習課題（学習内容）を自ら決定し、見通しをもって課題に取り組む学習活動として構想したものである。

自分タイムの学習活動は、子ども達が、学習とは楽しいものであり、自分たちの生活を豊かにしていくものであるという、学習本来の意味を再認識できる活動である。と同時に、この認識こそ、生涯学習につながるものであると考える。自分の課題を主体的に追究する学習活動によって、学習の仕方を習得し、自分自身を見つめ、自分や自分の生活を豊かにすることができると考えている。

自分の力で自分のやりたいこと（学習課題）を見つけ、主体的に学習を追究し、よりよいものを求めて、楽しんでいる姿は、本校でめざしている「自立に向かうこどもたち」の姿である。

ここで言う「学習」とは、従前の教科、領域という狭い捉えでは考えていない。自分の興味や関心が持てることを追究することも「学習」と捉えている。

子ども達の中には、日常生活の多種多様な体験のなかで、その子なりの興味・関心・疑問・こだわりをもっている子もいれば、時間的なゆとりがないために、興味の対象がはっきりしなかったり、興味のある課題に没頭して追究できにくかったりする子もいる。

子ども達は、失敗や成功を繰り返しながら、学習の仕方を習得したり、自分を見つめ、新たな自己を創造することができるのではないだろうか。その意味で、自分タイムでは、一単元だけで、育ちを見ていくというのではなく、低学年生活科から6学年までの積み上げを大切にしていきたい。

#### 2 自分タイムの学習活動の柱

##### (1) 課題の自己決定

一人ひとりの子ども達の日常生活や学校での学習の中から見つけ出された課題を、自分なりに考えた道筋に沿って学習計画を立案し、課題を追究すること自体を重視する。初期の段階では、「こんな活動してみたいな。」という思いはあるが、学習課題が明確でなく、学習計画が曖昧な場合もあるであろう。教師（大人）の価値判断で枠組みし、過度な要求をするなどしないように、その子の思いや願いが実現できるように支援していく。

また、課題の追究形式は、体験的活動、調査的活動、製作的活動など、個に応じて多様になり、学習場面も拡散していくであろう。図書室やコンピュータールームなどの室内や学校外で調べ活動をしている子もいれば、図工室で陶器を作ったりしている子もいるであろう。

教職員の個性を生かした指導・支援の場を確保するとともに、地域の人々、各専門機関などと密接に連携をとりあいながら様々なネットワークを作り支援体制を確立させていきたい。

##### (2) 探究・表現活動

表現することを通して、自分の思いや考えが整理され、明確になり、新たな課題が発見されることも多い。表現形式も、文章、絵（マンガも含む）、身体表現（劇、パントマイム）など多様である。

他者から好評価を得る発表のための表現ではなく、学習課題を明確にし、修正できるような表現を求めたい。発表のための表現は、その子自身の学習活動が疎外され、学習への意欲を損なうことにもなりやすい。子ども達の願いが膨らみ、「卒業論文・作品をつりたい。」「学年を越えて成果を発表したい。」などの願いが出てくることに期待したい。

また、子ども達の主体的な学習成果の積み上げが、作品として蓄積され、学年を越えた学習集団相互に感化・影響を与えるであろう。その成果として、課題や追究の質が高まり、学習の対象が広がり、学校文化の創造につながるのではないだろうか。

### (3) 自己評価（相互評価）

学習の成果は、自己評価のあり方によって決定づけられる。相互評価の場を通して、自らの学習を振り返り自己評価することで、学習への見通しが明確になり、学習の質が高まり、新たな課題を発見することができる。子ども達自らが、随時1時間の学習時間のめあてを明らかにして、学習の振り返りをする場を重視したい。追究活動が進むほど、学習課題が明確になり、学習計画を修正しながら、より主体的な学習が展開されるようになるであろう。その子にとっての高まりである自己の変容を自覚することに主眼を置きたい。

## 3 学習過程の基本的な流れ

学習過程は、①課題づくり（オリエンテーション）②学習への見通し（学習計画の立案）③展開（追究・修正・まとめ）④振り返り（発表・展示）の過程を基本とする。発達段階や個人の実態に応じて、各学習過程の指導の重点が異なる。追究自体への教育的な価値を重視しながら、学習計画の立案の仕方、追究の仕方、課題設定の仕方、追究結果のまとめ方、発表・展示の仕方、など随時指導・支援をし、その子にとっての成就感を大切にしていきたい。

## 4 支援の方針

### (1) オリエンテーションの場による学習課題の明確化

子ども達が自分タイムに魅力を感じることが大切である。日常生活場面や学習場面での興味・関心・疑問を日頃から出し合い、自ら追究したい課題を絞り込んでいく必要がある。ほどよい抵抗感があり、継続的に追究できる課題に絞りこむことができるように、前年度までの事例を参考例として提示することも考えられる。子ども達の学校全体に向けての発表意欲が高まれば、展示物を見たり、発表を聞いたりすることが子ども達の追究への糸口につながるであろう。

また、課題の追究が子ども達にとって負担にならないように、他の総合的な学習「人間」「自然」「コンピュータ活用」や、総合的な学習と学校行事「宿泊学習」「海の学習」「山の学習」「旅の学習」などの概要を説明し、自分タイムの活動日程を示しておく必要がある。また、学習課題や学習計画を掲示し、相互に学び合う場を設けることも支援として考えられる。

### (2) 学習活動の深化・拡充に向けての支援

子ども達の追究活動には、指導者の有効な支援が、不可欠である。例えば、どこにいけば必要な資料が見つかるのか、どのようにすれば道具（コンピュータなど）を使いこなすことができるのか、どのようにして資料を読み取ればよいのか、もっとよい追究の仕方はないか、どのようにすれば自分の思いや調査結果を適切に相手に伝えることができるのか、など学習の仕方に関わる様々な課題に子ども達は出会うであろう。そのとき、教師は一人ひとりの子どもにとってのよき支援者になり、子どもたちは、学習の楽しさを味わい、学習の仕方を学びながら、学習をし続ける学習者になると考える。

### (3) 個の追究を促す学習形態への配慮

自分タイムの追究活動は、一人ひとりの活動ではあるが、課題や追究方法が類似している場合は、集団で追究しながら、情報交換をしたり、相談し合ったりする方が学習効果は上がるであろう。課題の共同追究や追究結果のまとめの分担は、発達段階を考慮しながら、そのよしあしを検討していく必要がある。